

批評・紹介

ブリヤット・モンゴル史料集

Materialy dlya Istorii Buriat-Mongolov.

一ハンツミン・ブリヤット記

A. I. Vostrikov i N. N. Poppe : *Letopisi*

Burguzinskich Buriyat. Teksty i Issledovaniia.

Trudy Instituta Vostokovedeniia VIII.

Moskva-Leningrad, 1935

二ホリ・ブリヤット記

Letopisi Chorinskich Buriyat. Vyp. I. Poppe:

Choroniki Tugultur Toboeva i Vandana

Jamsuiova. Trudy Instit. Vostok. IX. Moskva

-Leningrad, 1935.

我國の蒙古學界は殆んどブリヤット蒙古には關心を持つてゐない。地理上の隔絶せる事がその主なる原因をなすであらうが、我が國防第一線の鼻の先きに *Avtonomno Buriad-Mongol Ulas* がソヴェト聯邦の一として存在し同盟兄弟國たる滿洲帝國内に巴爾虎布里雅特部などが含

まれてゐるとすれば、ブリヤット蒙古學にそう無關心であるてはウソである。ロシアとブリヤットとの關係深い事は地理的政治的にもさる事ながら、ロシアの東洋學者にブリヤット人の多いのを見ても知られる。殊にブリヤット・モンゴル自治共和國の結成されてからは、ブリヤット學文獻の出づる事盛んなものがある。その内隨分と一覽したいものが澤山あるが、僕には遺憾乍らこの欲望は抑制せられねばならない。茲に紹介せんとする「ブリヤット・モンゴル史料集」二冊は近頃編者諸先生の盛情によつて見るを得たる幸福の賜物である。

ブリヤット人の書いたブリヤット史志類の概略はポツペ教授のホリ・ブリヤット記の序文に略述されてゐるが、今度出版された三種は蓋し一八八七—八年のウフトムスキ公爵の東方巡遊に得た所である。ウフトムスキ公の東方旅行は佛教資料の調査蒐集が目的であつたので、その蒐集品の大略は Grunwedel 博士の解説が Bibliotheca Buddhica VI. に出で、又同じく此等資料に根據した博士の大著「西藏及蒙古に於ける佛教神話」が學界に貽られて、長く權威と見られてゐる。この旅行に際し公爵はブリヤット諸族に諸族史志の提出を命じ、これ等の史志が或

は鈔寫、或は撰著、或は翻譯されて進獻せられたと見える。だからこそ此等の諸ブリヤト民族志は單なる年代記以外に風俗信仰傳説に關する記事も含有されてゐるのだ。

史料集第一冊はバルグジン・ブリヤト記であつて、ラストリコフ氏は詳細なる序論によつて、バルグジン史上に於けるバルグジン記の位地を明かにし、又ツイデブ・ヂャブ・サハロフのバルグジン記の露蒙兩文の書誌學的説明を述べ、併せてニコライ・ツイワン・ヂャブ・サハロフのバルグジン志を解題し、次いでポツペ先生校定の史志原文、(一)ツイデブ・ヂャブ・サハロフの露文記、(二)ニコライ・ツイワン・ヂャブ・サハロフの露文志、(三)ツイデブ・ヂャブ・サハロフの蒙文記を各々詳細有益なる注記と共に收めてゐる。

第二冊はホリ・ブリヤト記類であつて、ポツペ教授の校刊になる(一)ツグルツル・トボエフの蒙文記、(二)バندگان・ユムスノフの蒙文記とを收めてあり、卷首にブリヤト史類の略説とトボエフ、ユムスノフ兩人の略傳がある。此等兩記の露譯も既に完成されてゐると云ふから追つて出刊さるゝに至るであらう。

此等史料の研究は固り我國では彼地學者のそれを待つより外無からうが、又そう我國學界が一顧もせずしていいものでは無い筈である。僕の如きすらが此等を利用して何等かの試みをして見たい氣があるにはある。然し早速に此等を批評し去る勇氣はない。臆を得て蜀を望むんではないが、各記志原本の寫眞版が一葉宛でも挿入してあつてほしいと思はれる。尙ほホピツエフのホリ・ブリヤト記はカザケギチ氏により、ロムボ・ツエレノフのセレンガ・ブリヤト記はポツペ氏により引續いて校刊される由。

(石濱純太郎)